

# 第11回 ROBO-ONE テクニカルレポート

半年ごとの開催で第11回、つまり6年目に突入した二足歩行ロボット格闘大会・ROBO-ONEは、今回ついに“格闘技の聖地”後楽園ホールでの開催を果たした。さまざまな意味で新たなROBO-ONEの幕開けとなったこの大会をあらためて振り返ってみよう。

みきお

ROBO-ONEは(株)ベストテクノロジーの登録商標です。

## 参加台数・出場機体数ともに過去最高

誰も二足歩行ロボットで競技ができるなんて思っていなかった2002年2月に始まったROBO-ONE。回を追うごとにルールが厳しくなったり、規定演技を設けたりというマイナーチェンジが行われていたが、6年目を迎えて二つの大きな変化が起こった。

1つは、決勝トーナメントの**重量分け**。といっても決勝進出した機体を重量順に並べ、軽いほう16機を「軽量級」、重いほう16機を「重量級」としてそれぞれでトーナメントを行い、最後に優勝者同士で総合優勝を決めるというスタイルなので、ボクシングや柔道などの「○kg以下」というようなクラス分け方法とは異なる。

もう1つは**決勝出場権認定大会制度**の新設である。いくつかの条件を満たした二足歩行ロボット競技会を“認定大会”とし、そこで優秀な成績を収めたロボットは予選を免除されるというものだ。今大会で

は「第1回ツクモCUP ロボットバトル大会」から ivre (遊)、「ロボファイト4」から YOGOROZA-V (だうと)、「姫路ロボ・チャレンジ」から KZR-5 (KAZZ)、「わんだほーろぽつとか〜にぼる」から クロムキッド (KUPAKUMA)、「ヒューマノイドカップ ロボットスプリント&バトル大会」から成龍 (きゃのん) という5大会からの5機が権利を得て登場した。

その結果、予選通過枠は32から27に減少。エントリー186機、予選参加だけでも100機オーバーという、どちらも史上最多となった大会だったことも考えれば、史上最も厳しい予選になったと言っても過言ではないだろう。

毎回参加者を悩ませる規定演技は、**縄跳び**という機体側の技術的ハードルに加えて、**人の役に立つこと**という、頭をひねらなければならないものが付け加えられていた。

3分1本勝負・3ダウン制という試合のルールはこれまでと同じだが、歩行中に転ぶなど、これまでは立ち上がればダウンに数えられなかった「スリップダウン」が、2回で「1ダウン」という扱いになった。また、ダイビングパンチなどの“捨て身技”は種類を問わず1試合に1回だけしかダウンを奪えなくなり、失敗すればスリップダウンとして数えられることになった。

会場となった後楽園ホールは**格闘技の聖地**と呼ばれる場所で、通路には歴代のボクシング世界チャンピオンのパネルが飾られている。もともと「見る」ことを意識している会場ということもあり、ひな壇になった観客席は後ろのほうからでも座って試合を見ることができた。ただ、やはり距離は離れてしまうので、オペラグラスなどの用意は必要だったかもしれない。



会場となった後楽園ホール。ボクシングやプロレスなど「格闘技の聖地」と呼ばれている。奥に見えるのは東京ドーム



ひな壇になった観客席からの眺め